セントラルケンタッキー日本人補習校　　令和５年（2023）12 月 2 日

ＣＫＪＳだより

第 70 号

校長　松平　昭二
shoji_matsudaira@hotmail.co.jp

潜在能力

日本では、冬になると毎週のようにマラソン大会や駅伝競走が行われています。かつての名ランナーの一人に君原健二という選手がいました。今から 55 年前に行われたメキシコ・オリンピック大会において、マラソンで銀メダルをとった人です。

興味深いのは、この君原選手の生い立ちを見ると、とても将来銀メダルをとるような人とは思えないことです。まず、運動会で１等になったことがありません。運動だけでなく、学校の勉強もよろしくなく、いわゆる「劣等生」だったそうです。子どものときに受けた表彰は、皆勤賞だけでした。

中学 3 年生のときに、県の駅伝大会に出場しましたが、チームメンバー7 人のうち 7 番手でした。高校 3 年生の時に、全国高校総体に 1500m走に出場しましたが、地区大会をぎりぎりの記録でやっと通過しての出場だったそうです。

4 つの会社の入社試験に落ちて、3 月の半ばになってやっと八幡製鉄（現在の日本製鉄）に内定しました。銀メダルをとった時も、前評判は３人の日本選手のうちの３番手で、あまり期待されていませんでした。

ただ、君原選手は、50 回近くマラソンに出場しましたが、ただの一度も棄権したことがありませんでした。「次の電柱まで」と、小さな目標を積み重ねながら、ひたむきに走り続けてきたから完走できたと言っています。

君原選手は、そんな自分を振り返りながら「人は、誰も、大きな潜在能力をもっている」と言っています。今は表に出ていないけれども、見えない秘めた力を誰もがもっているということです。その見えない隠れた力がどうすれば表に出てくるか、それは努力によるものだと言っています。

子どもたちは皆、見えない隠れた素晴らしい力を体の中に秘めています。子どもたちには、その見えない力を「次の電柱まで」と少しずつ目標を重ねながら、努力し続け、大きな力に育てていってほしいと願っています。そして、私たち大人は、それをゆったりと大きい気持ちで見守っていきたいものです。